

石巻に布施辰治の生家を訪ねて

北原 道子

石巻は、私の住む仙台から海岸沿いに、電車で一時間半近く北に行ったところにあります。今は漁港として知られている程度ですが、かつては西への玄関、奥州第一の港として賑わったところでした。司馬遼太郎の『街道をゆく』には、「江戸期、石巻湊の存在は、かがやかしいものだった」とあります。「三十五反の帆を巻きあげて／行くよ仙台石巻」という千石船の船乗り唄にあるように、「石巻」という地名はそういう時代の象徴であり、たれもが豪儀な印象をもった土地だったのです。

その石巻を訪ねてみようと思ったのは、ここが、弁護士としてまた、社会運動家として朝鮮人の裁判闘争などに尽くしたとして知られる、布施辰治の生まれ育った所だからです。

辰治の名をはじめて知ったのは、もう随分前のことです。むくげの会で、関東大震災の朝鮮人虐殺について共同研究をした時に日本人の対応を調べていて、自由法曹団の一員として朝鮮人虐殺の真相究明にあたった辰治の名を知ったのでした。その時には、岩波新書の『ある弁護士の生涯』を読んだきりになっていたので、二年ほど前に、思いがけない所で、辰治の名を聞いたのです。梶村秀樹先生の一周忌の追悼集が、川崎で開かれた時のことです。朝鮮奨学会の李殷直氏が、梶村先生は布施辰治のような人だったと言われたのです。朝鮮人にとって、布施辰治の存在

がどういふものかを、うかがわせてくれる出来事でした。

布施辰治は一八八〇年、宮城県牡鹿郡蛇田村で生まれました。哲学の道を志して上京するまでの一九年ほどを、ここで過ごしたのです。石巻の郊外にあたる農村で、今は石巻市蛇田。生家に近く「布施辰治出生の地」の石碑が建っていると知り、そこへ行ってみようと思ったのです。前日までの春うららといった暖かさとはうってかわって、強い寒風の吹くほこりっぽい日でした。碑を訪ねるだけのつもりだったのですが、案内をしてくださるという言葉に甘えて、辰治の実家を訪ねました。

辰治の生家は、石巻から車で一五分ほど北西へ行った国道沿いにありました。当時の家ではなく、新しく建てかえられています。辰治の父、栄次郎の長兄である東吉の孫にあたる布施昭平さんが今の当主です。辰治にまつわる思い出話をいちいちうかがいました。

昭平氏が辰治と直接、接したのは、辰治が弁護士資格をはく奪された後（三・一五共産党事件における弁護活動を問われ、懲戒裁判にかけられた末、弁護士資格をはく奪された）、治安維持法違反で入獄していた千葉刑務所を出所した、昭和一五年頃から二〇年まで、実家に帰って来ていた頃のことだそうです。「石巻のいまでいふ共産党の人が（辰治を）迎えに来たりした。公民館に集まって、何かやっているようだった。当時、自分は一七、八歳の頃で、おじさんがどんなことをやっているのか、よく分からなかったし、語らなかつた」「ざつくばらんでねぐて、とても厳格な人だった。ああしなさい、こうしなさいとうるさく言われた。先見の明のある人だった」「昭和二〇年の八月一五日にはここにいた。（敗戦の報を聞いて）「今から世の中は、うんとよくなる」と言っていたんだねえ。へこれから忙しくなる」と言って帰って行った」などと話をしてくださいました。

また、朝鮮人にまつわるエピソードとして、こんな話もしてく

ださいました。一九四七年に、辰治は宮城県知事選挙に立候補しているのですが、急性肺炎で倒れ、石巻の日赤病院に入院したことがあります。その時に石巻の共産党の支部長と一緒に、朝鮮人連盟の人がペニシリンを持ってきてくれて、それで一命をとりとめたのだそうです。病院には薬がなくて助からないと言われていたのです。石巻の朝連と行き来があつたわけではないが、辰治が倒れたということ、組織から連絡がいつて、それで来たんじゃないかというお話でした。また、辰治はその朝鮮人と朝鮮語でやりとりした。多少心得はあつたんじゃないか、とも話されました。布施柑治著『ある弁護士の生涯』によれば、義烈団事件で渡朝した折、朝鮮語ができないのに（聴衆から）解つたと思われたというエピソードが出てきます。朝鮮語で話したとすると、あいさつ程度だつたのでしょうか。昭平氏の記憶では「へおじさん朝鮮語話せんだってねえ」と聞くと、へいや話せないサー、なんてニヤニヤ笑つていたのだそうです。

また、辰治の家では、いつ誰が来てもいいように、いつでもお釜一杯のごはんが炊けていたといひます。様々な人々が、辰治の家に出入りしたようですが、その中には朝鮮人も沢山含まれていました。

古い写真もいくつか見せていただきました。家族と一緒に写した若い頃のもの、普通選挙運動をした時の記念写真、父栄次郎の生前に写真がなかったたので、亡くなった時に着物を着せ、後から支えて、東京から来た写真屋に撮らせたという写真（顔が白くぼやけていてよく分かりませんが）もありました。辰治が東京で苦学していた頃の和紙をとじた出納帳には、学費や生活費などが細かく記されていて、豪放磊落なイメージを抱いていたのですが、とてもきちょうめんであつた一面も知つたのでした。

最後に、「布施辰治出生の地」の碑まで案内していただきました。もとは生家の向かいにあつたものを、一〇〇ほど離れた所

に移したのだそうです。この碑には、辰治が生前好んだ「生きべくんば民衆とともに、死すべくんば民衆のために」「正しくして弱き者の為に余を強からしめよ」と刻まれています。一九五六年に辰治の甥や有志の人たちの手で建てられたいうことでした。

地元紙の石巻新聞の記事によると、この甥にあたる太田隆策氏は、戦前「満州」（今の中国東北部）に渡り、一緒に仕事をした朝鮮人から辰治の名を聞いたのだそうです。「あの人は立派な人だ。フセタツジ。あんたはフセタツジを知っているか」と。身内だからということだけでなく、石巻出身の一弁護士が大衆に捧げた心をいつまでも残しておきたいというのが碑を建てた理由のようです。

布施家を辞して、再び石巻へ戻りました。駅前から裏通りをしばらく行つた所に「三十五反」という古本屋があります。ここを訪ねたのは、店主の桜井清助さん達が、八年前から「布施辰治先生を顕彰する市民の会」をつくつて活動をしていると知つたからです。

店の片隅で、一升ピンを傍らにデンと置き、学生らしい若者と、一ヶ月も風呂に入っていないと大声で話す。ボサボサ頭の偏屈そうなおじさんといった風体で、声をかけるのがためられました。それでもと思いきつて、辰治と朝鮮に関わる資料について聞きたいと言うと、ざつとばらんに話してくださいました。そればかりか、貴重な資料や論文などもいくつか出してくださったのでした。「本当は資料をきちんとまとめることが必要なのだが、研究ではなくて顕彰なんです。酒飲みながら月に一度十三日の命日の頃に集まつて、辰治についてしゃべっている」ということでした。没後、蔵書などは母校の明大図書館に、朝鮮関係の資料は、朝鮮大学校に寄贈されていることも教えていただきました。

見せていただいた資料の中には、「布施辰治氏生誕七〇年祝賀人権擁護宣言大会」の記録がありました。一九四九年十一月一二

日に明治大学記念館講堂で開かれたものです。辰治の古希を祝って、出席者が祝辞を述べた後、辰治自身が人権擁護宣言を行っています。祝辞を述べた人々の中には、平野義太郎、中野重治、浅沼稻次郎、大山郁夫等にまじって、高チヨウイツの名が見えます。朝鮮解放救援会を代表として祝辞を述べています。この中で高氏は、「日本におけるわれわれ朝鮮人の立場を誰よりも深く理解され、日本の反動支配階級の暴圧から、暴却（ぼうきゃく）な他民族の抑圧によって踏みにじられた朝鮮人の権利を守るため、最も献身的に闘ってくださった方であります。（略）先生がわれわれに対してなさった貢献に對しましては、これは只日本に在住する朝鮮人のみでなく、わが祖国統一の闘いに結集された全朝鮮人の尊敬の的となるであろうことを確信するものであります」と述べています。

この大会のチラシが、昨年一月に石巻で開かれた「布施辰治遺品展」で展示されていました。石巻図書館で開かれた遺品展には、二一点とささやかではありましたが、辰治の遺品が並べられていました。愛用の机、法衣などとともに、総連から送られた民族教育の支援に対する感謝状、七〇年祝賀大会の時に贈られた辰治の胸像と肖像画などが展示されていました。その中に、このチラシがあつたのですが、最後に記された世話人の中には、朝連の幹部であつた尹権の名もありました。

それとは別に、「S二二・二三か」と記された「在日朝鮮人問題に就て」と題する資料も展示されていました。残念ながら、内容まで見ることはできませんでしたが、司会者 金英準、李心喆（？）、韓徳洙外常任委員一同、出席者は辰治の他、平野義太郎、鹿地亘とあり、朝連の資料かと思われました。

今、石巻ではこうした遺品を保存し、公開できる資料館づくりの構想がもたれているようですが、辰治の亡くなった直後に、布施辰治記念館構想があつたことを知りました。場所は東京・江東方面、建坪二〇〇坪位で、見取図、平面図もできており、募金要

領も、一口五〇〇〇円、一〇〇円までと、かなり具体的に計画が進んでいたことが分かります。布施記念館建設委員会の名で一九五三年一月二九日に建設趣意書が出されています。この委員会は顧問に松本治一郎、実行委員長馬島卿で、李竜載、李康勳、李玉（王？）童、李在東、李鐘洛、玄元鶴、康鳴球などが名を連ねています。用途としては、法律相談、生活相談、人権問題研究所、診療所から講堂、図書館に至るまで、相当の規模のものが考えられていたようです。実現しなかったのは何故だったのでしょうか。この遺品展は、人権擁護に尽くした弁護士として辰治を紹介するなかで、朝鮮人など被抑圧民族の人権擁護のために弁護活動に投じたことを、「当時としては、自らの生命の危険を伴う勇氣ある行為であり、このこと一つみても、辰治の思想と行動は世界に誇るべき」として、評価していました。

あわただしい石巻訪問でしたが、布施辰治という人間の一端に触れることができたように思われる小さな旅でした。辰治と朝鮮との関わりについては、系統だった研究がほとんどないことにも気づきました（私が知らないだけかもしれませんが）。弁護活動の多くが、朝鮮独立運動や、在日朝鮮人運動に関わるものであり、そうした運動史との関連の中で明らかにされていくべきものなのかもしれないとも思いました。また、朝鮮人の側の評価とは別に、辰治の思想、行動の両面から、日本人として朝鮮（人）をどう見ていたのか客観的に跡づけていく作業も、まだこれからのように感じました。

石巻新聞によると、辰治のお墓は東京の池袋の常在寺（池袋駅前の南池袋公園の隣）にあるそうです。帰京の折にでも、一度訪ねてみたいものです。